

翻刻・『俳諧雅楽抄』

堀切実

解題

翻刻・『俳諧雅楽抄』

(272)

論客支考とならび、蕉門を代表する俳論家として、終始、蕉風俳諧の理念と方法の究明に意欲的であつた森川許六の説を窺う資料としては、『俳諧問答』(元禄十、十一年稿)所収の「俳諧自讃之論」「自得発明弁」をはじめとして、『篇突』(同十一年刊)、『宇陀法師』(同十五年刊)、蕉門野坡との応酬による『許野消息』(正徳四年稿)、そして『歴代滑稽伝』(正徳五年刊)があり、また門下の伝える論書として孟遠の『桃の杖』「発句菊阿口義」(享保四年刊)や『秘蘊集』(享保九年稿)がある。今ここに翻刻を試みた『俳諧雅楽抄』も、これら諸書の説と多くのかかわりをもつ重要な一書であるが、従来未翻刻のためか、一般に用いられることのほとんどなかつたものである。(拙稿「取合せ論の検討」『国語と国文学』昭46・3、「許六俳論の構造」『国文学研究』48集に天理本により一部引用)ここに翻刻紹介するのは、大阪女子大学図書館・山崎文庫所蔵の

写本(半紙本)一冊で、表紙は近年の改装によるもので紺色厚表紙、題簽(左肩)に「俳諧雅楽集」、また、元の共紙表紙があり、これには右肩に朱で小さく「宝永三年三月」、中央に「俳諧雅楽抄」、中央下に朱で「許六」と書かれており、本文は丁数二十九丁(うち序文と思われる部分一丁半)、一面(半丁)に十行(ただし、季題解説の部分は不定)、巻末奥には「宝永三乙酉三月」とみえるが、書体・用紙の具合などからみて、江戸後期以降の写しと推測される。本書の伝本としては、他に天理図書館・綿屋文庫蔵のもの二種(甲『俳諧雅楽集』・乙『正風雅楽集』、および徳島県立図書館所蔵のもの)、『国書総目録』によつて知られ(山崎文庫本は未載)、このうち天理本甲『俳諧雅楽集』をみると、仮名の部分がすべて片仮名で表記されていて、片仮名交り文になつてはいるほか、内容上も、論述の順序、論旨の一部、また季題配列などにおいて、山崎文庫本とはかなりの異同がみられる。(他は未調査)本書の構成は、自序(天理本は、末尾に「宝永三乙酉歳三月 蕉

門道統二世 五老井許六著」と記す。および前半の俳論部と後半の季題本情の解説部とから成つており、「俳諧の二字」「風雅の二字」「俳諧の道」などの史的考察にはじまり、「虚実の事」に独特の虚実論を示したあと、「発句案方の事」に至つて、得意の掛合せ（取合せ）論を中心として、蕉風血脈の発句構造論が展開される。この間一貫する許六の態度は、芭蕉流俳諧のいわば「雅楽」的な特質を強調して論じている点であり、後半部に季題解説を付したのも、四季の題の心についての蕉風的理解を助けるためであつた。ただし、本書の内容の検討は、異同のある他の伝本との比較をふまえて、なお、今後にまたねばならない点が多い。

翻刻に当つては、読解の便のため、適宜、句読点・濁点（一部には返点）を付した他、印刷上の都合により、漢字は多く新字体に改めた。なお、行移りや丁・面の移りについては特に示さず、また、天理本との校合も原則として省略した。

付記、翻刻を許可された大阪女子大学図書館、およびいろいろとご便宜ご教示いただいた雲英末雄氏に感謝いたします。

俳 諧 雅 楽 抄

それ雅楽はよく国を治め、嬉楽はよく国を乱る。簫笛琴瑟の類、其調淡くして小人の耳には面白からず。しかるを、君子楽みて、其音の雅なる所を俗に教へて治国の始とす。嬉楽は三絃尺八の類、其調重して、はなはだ俗の面白がる処也。是、人欲にほこり、奢のものと成る故也。爰に俳諧に取ていはゞ、他流ハ嬉楽のごとく、芭蕉流

は雅楽のごとし。君子ならでは面白からざる、真のたのしみなるを、今日我家の俳諧に楽しむ輩ハ、俗に在ながら俗をはなれ、こゝろを正しくして、なをも君子に至らばやと願ふの導也。翁曰、和歌に治世の音、乱世の音、共に有となん。御製并殿下の詠歌等変風体を去ルといふは、専ら治世の音を守らるゝ故なるべし。上達部・殿上人ミな其正雅体にならひ、百謀千慮する事也。和歌の撰集は、もと治乱をはからんためなりとぞ。蕉門の俳諧亦治世の音を宗とするなり。雅楽は治具なり。このこゝろにひとしからん歟、かならずしも嬉楽の邪門にたゞずむ事なかれと也。

一、俳諧之二字の事

俳諧の二字ハ古来に穿鑿ありて、あるひハ字書に誹ハ非の音也と、或史記の滑稽伝を引て俳の字に定たるも、せんさくの理ハ明なり。然ども、古今の集より誹の字用ひ来れり。されば、此類ハ、古実とて誤る事も、其通にて用る事も有る也。尤、八雲御抄にも、俳諧と誹諧との二様あり。されども、我家には、俳諧に古人なしと看破する眼より、玄とも妙とも、名は別に定むべけれども、強て名のせんさくは入らず。尤、敷嶋の道は、人のこゝろを種とすとあれば、今より我家には俳諧の二字しかるべし。他門に対して論ずる事なかれと翁宣ふ。

一、風雅之二字の事

此道の文章に、六義の中の名を分ちて、是を口伝と云ふハ、風ハ諷にして其物をよそへ、木にあたり艸にあたり、其姿を見する物故

にや、よそへ歌といへり。雅ハ正しきにしてかざらず、其詞を和らぐ故に、正言うたといへり。其一ハ天地の虚ニおこり、其二ハ人間の実にとどまる。発句の題は雅にあたりて実也。掛合ハ虚にして風情也。風情ハ変化してして我手柄となす。題は実にして流通のものなれば、我手柄にはあらず。こゝろを乾坤にめぐらし、よき掛合を求め、風雅の二字に遊べしとなり。

一、俳諧の道といふ事

或人問、儒仏神ハ三国の道の大綱なり。しかるに、俳諧の道とはいづれをさして云にや。翁答、抑はいかしの道といふハ、我朝二柱の御神より代々伝へたまひし敷嶋の道の流にして、やんごとなき天地の道なり。又問、俳諧は滑稽なりとハ如何。答、滑稽ハ中華乃俳諧の名也。善為_二笑言_一然合_二大道_一。譬へば仏の道に達摩の寂ありて、別に教を立、仏性を味ふ事を教へ、儒に老荘の別出て、仁義のかたミを破り、清淨無為を宗として、然も終りは聖の道に帰る。我俳諧も亦是にひとし。和歌の一体にして、滑稽を宗とし、俗談の常に居て常をはなれ、月花を愛して念着することなし。風雅ハ人の生ながら、天より得たるの道也。故に、愚なりといへども、おのづから花を愛し月を翫事をするは、是自然の風雅也。されば、此道ハよく五倫を和らげ、鬼神をも感動せしめ、世とよく推移りて、雲井の遊び、下さまのたのしみをしり、是非にありながら是非につかハれず、自在なる事、俳諧の徳也。只名利を捨て正道を守れば、和歌の操に同じ。豈戯言といはんや。凡、我門に入る者ハ、志を青雲の一路にあらしめ、財なき事を然とせず、宝ハ造化の無尽蔵也と思ふべし。取と

も禁ずる事なく、用て尽ることなし。日々に新に、かの宝蔵より金玉の句取出し、ちかくハ身を修め家を齊へ、遠くハ人を和らげ正路へ招き入べし。是を芭蕉流のはいかしの道とはいふなり。

芭蕉翁は、壮年より仏頂国師の弟子となり、起居禪三昧也。然るに、其ころ、靈源院御所国師を御信仰にて、参内の折から翁の自画自賛を献せられしに、御感ありて御文庫に納る。^{注1}或時日の画賛を殿上にかけられし事ありき。法皇御所叡覽まし_レて、実や芭蕉ハ俳諧の上手也、あはれ、今の世の歌よミにあれかしと御称美の綸言有けるとなり。

其句、土橋にしのおの画讚

橋桁のしのおの八月の名残かな

是、俳諧の妙道天地に貫通し、仏神も感応のためしなり。

一、虚実の事

万物は虚に居て実に動く、実に居て虚に動くべからず。実ハ己を立て人を恨る処あり。たとへば、花の散を悲しミ月のかたぶくを惜む。実に惜むハ連歌の虚也、虚に惜むは俳諧の実也。抑、詩歌連俳は上手に嘘を突く事也。虚に姿をあらはし、実に情をこむる也。たとへば、発句を案するに、其得たる所の題ハ眼前の実なり。掛合とりはやしハ隠れたる所の虚也。或前実後虚有り、前虚後実有り、虚実兼備して、自在の妙処に至れとなり。

一、発句案方の事

正風体の発句案じ方と云ハ、先人の心を種とすといふにもとづき、今日人情平話にかけて天地の変化に遊ぶべし。変化とは虚実の

自在を云也。方円善悪ハ言語のあやにして、道理は本より方円一合也。しからば、今日天地の変化に随ふべし。人は変化せざれば退屈するの本情なり。いはんや俳諧ハおのれが家に在ながら天地四海をかけ廻り、春秋冬夏の変化について月花の風情に渡るもの也。其変化を知りても、変化することを得ざれば、流行することあたはず。しかるに、難有も蕉翁かけ合といふものを教へ給ふ。其掛合は神代より有るもの也。始て掛合と云名を蕉翁見出し給ふ也。去ながら、其微細なる所に至てハ流行する所に、年々歳々句不同といへども、その血脉を得ると云ハ此掛合の事也。なお見取推量にはなるべからず。芭蕉流発句の大事と云ハ、此掛合にとどまる。扱、発句案様は、或題花題月と、何にても其題にて是を案する時、先其題へのけて置て、其題の心なる物縁のあるものを、我こゝろのうちより捜し出し、探りあたる物を、かの題と一ツに取合せて、継目を幽玄の手爾於葉・切字を以理屈なきよふに句作る事なり。篇突集ニ曰、世上発句を案するに、題号の中より案する、是なきもの也。余所より求来らば、無尽蔵ならん。題を箱に入おきて、其箱の蓋に上りて広く乾坤を尋るもの也。題号の中を尋て新しき事なきと云ハしれたり。たま／＼万ヶ一残りたりとも、其隣家の人同日に同題を案する時、同題の曲輪なれば、残りたるものにひしと尋あつべし。道筋かはらざれば疑なし。まして、遠里遠国において、いくばくか仕置侍らん。曲輪を飛出して案じたらんには、親ハ子の案じ所と違ひ、子は親の作意と格別なるもの也。翁曰、発句ハ取合もの也。二ツとり合せてよく取はやすを上手といふなりと云へり。有がたき教なるべし。た

とへば、日月の光に水晶を以題を移す時ハ、天水天火を得るがごとし。発句せんと思ふとも、案じざる時ハ出べからず。日月斗を案じたるとも、天火天水を得る事有べからず。外より水晶を求てよく取はやす故に水火を得たるごとし。水晶ありとも、とりはやす事をしらずしてハ、発句成就しがたしと云々。補曰、他流の俳諧ハ彩色也。正風体ハ墨絵のごとくにするものと心得べし。彩色する事なかれといふハ、平話にいひ続ける言葉あり、又云続けぬ詞あり。其云続ぬ言葉を無理に拵へつゞければ、是を彩色と云ふなるべし。平話にいひつゞける通の詞にて句作れば、是を先墨絵のごとしとすべし。たとへば、

腫物にさはる柳のしなへかな 翁

此句を或書に、腫物に柳の障るとあり。はれものにきつと柳のさへるべき事、平話になし。腫物に障ると云事に、柳のたをやかなる事をおもひ、掛合となせり。はれものに柳の障るハ彩色、腫物に障る柳ハ墨絵としるべき也。

発句の曲といふは、腫物にさへると云事を、柳に掛合す所の高低を以、曲の善悪を見る事也。其問の言葉には、天地の間に只一ツ極りてあるもの也。それに尋あたるべき事也。其つなぎに異形なる事を曲と覚たる人世に多し。其異形は彩色也。抑、当流発句案じかたの大事と云ハ、第一正風体を宗とする也。是、見聞たる所を句作る也。是にてハ多く面白からず。故に、幽玄の寂・細味へ掛て、人の感ずる事をする也。先、田家の情をいはゞ、曰に麦を入たるは常也。芋を入るといふが、さび・ほそミなりと云々。

解曰、先ヅ正風体を宗といふハ、不易の体にする事也。不易と云ハ、句の上に隠れたる所なく、門前のうば・かゝまでもよく聞ゆるやうに句作る事也。又、見るやう体にもする也。見る様体とは、

田子の浦にうち出て見れば白妙のふじの高根に雪ハ降つゝ
朝ぼらけ宇治の川霧たへくゝにあらわれ渡る瀬々の網代木

住吉の松を秋風吹からに声うち添ふる沖津白波

此三首を俳諧発句の父母とせよと翁の教なり。又曰、この見るやう体と云ハ、別而大事なり。見る様体の句は、古より餘多いひふるして、一作なくては叶ひがたし。其一作ハ妙々の処にて、作る者も少く、又聞人もすくなし。古人の跡を追て多くは古くなるもの也。翁も猶古人の跡ハ求じ、古人の求たる所を求よといへり。又、不易の句ハ、伝なき人の耳にハ古く聞ゆる事あり。よつて、ひたすら古き事のミ申て正風なりといふ人世に多し。蕉門血脉の大事は、不易にして新しく流行するの伝也。故に、千歳不易・一時流行と教へ給へり。先ヅ田家の情をいはず、曰に麦を入たるハ常也。芋を入たるといふがさび・ほそミなりと云は、麦を入たる斗ハ常にして実のミ也。実斗いふ時ハ連歌の意也。芋を入たると云所、虚を扱ふ俳諧の変化をしるべし。又、幽玄のさび・細味と云ハ、先手爾於葉也とおもふべし。其故に、幽玄の備る為の切字といふものを入れて教へたる事也。委細は、切字の伝にて明也。又、さび・ほそミハ句のつゞき柄にもあり。たとへば、

雑水に琵琶きく軒の丸雪哉 翁

かくのごとく、雑水といふやうの賤しきものをさへいへば寂也と云

ふ人有。さにあらず。雑水に琵琶と続きたる処をば、当流のよミかたとも曲とも云也。他流にてハ、雑水と云やうの詞を誹言といへり。当流にてハ、俳言とはいはず。只句のうへに俳諧のあるないと云事をいへり。歌にも連歌にも、雑水に琵琶とは続けず。爰を俳諧にてハ寂・細味と云也。尤聞、軒の葎と吟じ侍る所も幽玄也。口伝第二は掛合、当流の眼也。このかけ合をしりたる人は、日々夜々行先くゝに発句有。是をしらざる故に、よき発句も持たず。常に発句なきとて苦しむ。蕉翁平生これをかなしめり。先ヅ、其掛合と云ハ、花に翌日ならふ、名月に三井寺の類也。其中ハ取合せよきやうに継目を合せて句となす事也。翁の句に一句にても掛合なきハなし。其花に翌日ならふとは、前書に、

あすは松とかや。谷の老木のいへることあり。きのふは夢と過、けふはいまだきたらず。生前一樽のたのしみ外に、翌ハくゝといひ暮して、終に賢者のそしりをうけぬ。

さびしさや花のあたりの翌ならふ 翁

翌ハ松とて、松木に似たる木有り。此木の願ひなり。是、世上のありさま、かくのごとき也。花と云ふハ桜にあらず。桜は花にあらざるにしもあらず。万物の上のよろしき処をさしていふ惣名也。桜ハ花にあらはれてといふ言葉にてしれたり。其花を羨ミ、我も翌は松になるべしと願ふ心の淋しさをうち出して、もの云ぬものに物いはせし妙々の所を知べし。又、名月に三井寺の門とは、

三井寺の門たゞかばやけふの月 翁

古人、詩に推か敲かためて案じ入て夢中のごとくなるを、人にあ

やしまれてたゞかれし時、扱は敲がよしと治定しけるより、僧敲月下門といふ句をもうけたり。江州三井寺ハ湖水の月を見るに便り有所なれば、三井寺の門とハ掛合されける也。如此相応のものを掛合す時ハ、日々に流行して無尽蔵とおもふべし。第三には、動くかうごかぬかと云事を、最初より案ずる也。春風の陽炎に動き、野菊の撫子に動く類、ひたとあれば、是とこゝろにためて、決定の上にて句作るもの也。それも掛合にて、此題にハこれにて動くまじくや動くべきやと定むる事也。題の本情をよくしり、掛合を求る規矩有り。あらまし末に記す。これ当流の伝也。なを微細の事ハ口伝。又当流に俳諧のよミ方といふ事あり。歴々の門人は是をしらず。和歌の上にも読方といふ事有。やんごとなき歌仙達の仰られ候。よミ方をしらずして、人の歌の善悪見へず。みづからの歌、たま／＼一首よミあてたりとも、寓中(寓)のよし承り侍る。俳諧には相違有べけれども、俳諧のよミ方も大概如此なるべし。此よミ方にて題を動かさず、又題と掛合と因む所をしる也。是を語氣貫通ともいふなるべし。たとへば、浜の鶉に袖ぬれてといへるがごとし。先よミ方といふは、第一かけ合の事也。古人の書にいさほし(を)明白なれども、かく伝なくてハ解しがたし。其掛合を設けたる時、題ハ鶉、掛合は浜也。二ツ取合せて、中の継目を幽玄に袖ぬれてと取なす也。是をよミ方とハ云ふ也。随分理屈なく、言外の意味深く、句の面軽く作るべし。又、句によりて其場をおもふ事肝要也。よミ方証句に、

杉の木の赤ばるかたや冬の月 許六

冬なれば、赤ばるとして、冬の字を動かさず、かたやといふ所よミ

方也。あかばる方より、たしかに冬の月ハ出るに極りたるといふ事にあらず。こゝらが俳諧の大意也。急度極りたるものならば、曲も節も有べし。是、無分別にいひ出したるもの也。此かたやと云ことばにして、題によくちなミたり。手爾葉一字の事にて大きな相違出来るものなれば、よく／＼習ひ得て句作有べし。第四には、連俳を分ツ。それ、はいかいは連歌を用ひず、又連歌を用ひぬにもあらず。世間、芭蕉流とて発句を見るに、多くは連歌也。是、滑稽といふ事をしらざる故也。この滑稽を宗とせざれば、蕉門の俳諧にあらず。されど、句によりて滑稽を入がたき事も有るべし。其時は歌連歌にせぬ言葉を切込、俳諧の魂を入れるもの也。たとへば、暮て行春のワかれは連歌也。けふきりの春の別は俳諧也。むかしより俳諧言葉といふハなけれども、歌連歌にせぬ言葉続ハ、ミな俳諧としるべし。守武・宗鑑より以来、俳諧言葉といふものをこしらへ、それを上ミへやり下へやり、少しづゝ新しミを付て、句にしたるもの也。宗祇の例の板返しにまかると申されしも是也。翁曰、今俳諧ハ世に三合ばかりならでは出ず。七合は残りたり。然らば、俳諧言葉といふハ入るまじ。是より七合の中にはいか様の事も沢山有るべし。わざとことばを拵へて、道を狭くするに似たり、と申されたり。抑、翁の俳諧は格別にして、世の俳諧とはうらはらなり。古より今までの俳諧ハ道具言葉等一通極り有て、是にて人情を削り立、組合せてはいかいとて書並べたるもの也。翁の俳諧ハ、人情平話の同然にして、よく人に通ることを工夫し出し、昔からのはい諧の形恰好に切ちよめて出したるもの也。後代の学者、其うらはらなる所を識

得して、眼を明にすべしとなり。

一、諸題の本情、掛合の規矩大概乃事

春之部

梅ハ 底寒き心 奇麗なる事 埒の明た事 さつぱりとしたる事

春になりたりと云心專一也

梅が香ハ 香の字ハ其徳を嘗る心也 又神代の事を思ふべし 天子の事なども にぎやかなる心も

梅の匂ハ ほのかなる心也 幽に見ゆるも匂ふ也 淋しき心も有

花ぞ昔の香に匂ひけるにておもふべし。

梅咲ハ 長閑になり初る心也 惣じて梅にかぎらず咲といふ時ハものゝ起る気味なり

鶯ハ 初春の心持第一也 春の使と見る習ひ也 尋て聞こゝろ有べし 一羽ならで居るとはせず 別に伝有り

柳ハ 朝気色よし のんどりとする心 直なるこゝろ 静なる心

眠たき心 尤水辺也

青柳ハ ほのぐらき心 あやなき心 二三月の題也

若菜ハ 七種の惣名也 わづかなる心 珍らしき心 惣じて若の字の付くものハさかんに伸る心有り 随分若の字に心をつくべし

若艸ハ 大概前と同じ 場所の見立にて若艸極る也

七種ハ 拍子有り 人日の句七種とおく時ハものをかぞゆる心 曉

の事もよし

余寒ハ ものゝ滞る心

松の花 十かへりに一たび咲花也 めでたきこゝろにすべし

路の臺ハ ものゝ味の春にかたると云心 わづかなる心も有り

田打 しのびのさま 豊なる春に逢ふたる心

畑打 其人の姿もよし

朝鷹 両様同じもの也 また寒き心也

継尾鷹 句中に雪をもたする事習ひ也

猫の恋ハ 人情にかけておもふべし

白魚ハ おぼつかなき心 かよわきこゝろ 曙の姿よし

永き日 心持同様也 ものに退屈する心

遅き日 天氣美ハしく作るべし

東風ハ 暖になり初る心 艸木をきざし動す心

霞ハ 遠く見るに気色有 近く作れば霧に動く也

陽炎ハ 陽気の起る心 天氣よき姿 昼前の事也

糸遊ハ 陽気の空まで満たる也

椿ハ 落る事を云 放れのよき心 落ても行義を崩さぬ事をも賞する也

初午ハ 時候の掛合見立有べし 都かたの事よし

涅槃会ハ 哀傷の詞よし 懐旧のこゝろも又有べし 時候なども句

作るもよし

苗代ハ 奇麗なる事 伸る心のはやきも云

焼野ハ ものゝ見劣したる心

芦の角ハ 伸る心のものを突ぬく勢ひ有り

紅梅ハ よしあるさまながら見おとりする心 龍のさめたる官女の

ごとし

初桜ハ 一重の花也 風雅なる事 珍らしき事 見飽ぬ心 初字に

こゝろをこむべし

初花ハ 初桜に心かよふといへども花の字にて分れたり

採木ハ 末たのむ心

燕ハ 往来に隙なき心 むつまじき心 馴染こゝろ 居所体よし

帰雁ハ 別れおしむ心 春ハ北へ／＼と行ば鳴おしみて天高く行也

高く見る姿よし

雉子ハ 勢ひありて淋し 昔を忍ぶ心もよし

雲雀ハ 暖になり天気晴きつて自然と人の氣を浮立るこゝろ

蛙ハ ものに及がたき心 或は形をも云 声の淋しき 夜分を専ら

とす

蝶ハ 戯る心 眠るこゝろ

菜の花ハ 暖なる也 天氣の体 日中比の事よし

鳥の巢ハ 木立ふりたるすがた 虻蜂ハにくき心

鳳巾ハ 行衛覚束なき心

雛ハ 堂上方をおもふ心 夫婦の情もよし もの語の佛など有るべ

し

鶏合ハ 若殿原の遊び 勢ひ有り姿

汐干ハ 男女打群るゝ姿 恋の情又有り 長閑なる心

桃ハ 低きもの 賤しき心 暖なる心 田舎体よし うつとしきこ

ゝろも又有り

山吹ハ 清き心 水を見る体よし

桜ハ 派手風流にうき世めきたる心 花麗全盛と見るべし

山桜ハ 一重の花也 山の字に心あるべし

花ハ 世界一統に賞翫する心 万物の花也 春色の広き所をおもふ

べし

花見ハ 曠がましき心 ゆつたりとしたる心 両様かよひ安すし

花盛ハ 見の字盛の字に心をつくべし

花の雲ハ まだるき心 眠たき心 日永の心持有るべし はるかな

る心 高きこゝろも有るべし

花曇ハ 底濁りある心 底面白き心 ものに隙ある気味よし

藤ハ 覚束なき心 爵陶しき心

梨花ハ 美人涙を帯たる姿 底寒き心

鶯ハ 曇りたる心 あへれに淋しき心

駒鳥ハ いさましき心

出代ハ 心の中に名残惜しむ心 跡を濁さぬ心

藪入ハ いそがしき中にふと隙を得たる心 田舎体よし

春の雪ハ 根のなき事 うすき心 淡雪同意也

行春ハ 盛りなる人のあたまを丸めたる心

夏之部

更衣ハ こゝろの軽くなりたる事 氣の替りたる心もよし

卯の花ハ 曙の氣色を宗とする也 垣雪の事はむかし今にかはるこ

となし

郭公 待て聞心 曇ある心 夜分尤よし 風雅の人と見立る事習ひ也 別に伝あり

牡丹 富貴なる心 寛瀾なる姿

芍薬ハ 医者めきたり

若葉ハ 晴天になりたる心 ぬれ／＼として涼しき初也

杜若ハ 朝気色よし 清き心 涼しき心もよし

夏木立 茂りて潤ふ心 くらきこゝろも有るべし

新樹

若竹 伸上る心 風露など持習ふ姿もあり

短夜 明やすく哀なるこゝろ

あやめハ 匂ひを賞美也 春の花絶果て後匂ひ有物をはじめて見たる心 快きもの 涼しき心又有り

蟬ハ 暑き心も涼しき心も有り はかなき心

田植 上代の姿 古風残りたる鄙の風俗を賞する也

早乙女 人情忍とのさまもよし

蚊ハ 鬱陶しき心 こゝろのもつれたる気味有

蚊遣ハ 暑き姿 覚束なき心も有 貧家の体よし

蝸牛ハ 住居の覚束なき心 雨ある心 淋しき姿

扇ハ 涼ミに礼を正すこゝろ

夕顔ハ ほのかなる心 貧家の体 夕の字に力入べし

青田ハ 涼しく遠く見晴らしたる姿

昼貞ハ 暑き姿 頼みなき心 里遠き気味 日中の気色

桐の花ハ 堂上めきて高き姿也

鶉舟ハ いとなミのかなしき体

螢ハ かすかなる体 内に有る思ひの外に顕る心

水鶏ハ たゞく心 夜分の体よし

涼ミハ 自也 わづかの所に思ひ懸ぬ涼有を専ら賞す

涼シハ 他也 景気にあるべし

暑ハ いやしき心 うつとしき心

夏坐敷ハ 奇麗なる心 涼しく見晴しあるべし

瓜ハ 暑も涼も有り 珍らしく味合ふべし

雲の峯ハ 暑に勢ひ有心 日和の体よし

御被ハ 心のかはる気味 又ものを忘れ果たる心も有

秋之部

初秋 ものゝ半過て又改る心 少し涼しくなりたる心

今朝の秋 物に驚く心 句中に風あるべし ものに気をつく心

七夕ハ 古の恋を底意に持つ心 又ものを数ふる心

天の川ハ 空晴て涼しき心 二星の心なき句ハ七夕にならず

踊ハ 賑やかなるもの 恋を内に持てなつかしき心

相撲ハ 古代めきて任侠の心あるべし

虫の音ハ 惣名也 ものに便なき体 又淋しき心

蚤ハ 哀に淋しき心

松虫ハ 賑なる中に淋しき心 又待と云心もあるべし

鈴虫ハ 淋し 世に云松虫ハ鈴虫にて鈴虫ハ松むし也

鶉ハ あれ也 夕日の気色 夜明の姿もよし
 雁ハ 秋の来る心 ひきて見る体 雨をふくむ姿もよし
 鳴ハ 無常の心もふくむべし 秋の題の中に是などさびしきものな
 し

渡り鳥 空をおほふ心 海上に見る姿などよし

鹿ハ 哀也 声を賞す 又姿もあるべし 夜分よし

朝顔ハ 覚束なき心 纒の間を云 又めでたくも有べし 垣体ハ勿

論 朝の字に気をつくべし

女郎花 かよわき姿

萩は 寝起の心 露を持たる姿 朝夕の心よし

薄は 風を持たる姿 花とも云 よわき心も有

艸の花ハ 惣名也 場所の分有べし

花野ハ 草の花にかよへり 野を広く云べし

紅葉ハ ものゝ際たつ姿 内に淋しき心あり 桜にふれ安すし 春

秋の心をよく／＼考べし

菊は 隠逸の心 色々の姿も云 山路なども有べし

蔦は 執心の深き心 古木の姿よし

夜空ハ 不風雅なることにて淋し

菊の香ハ 昔しなつかしき心 天子の事などもよし

菊の酒 むつまじきこゝろ

きぬた 古郷なつかしき心 遠く聞体よし 貧家の体 嬬の体など

あはれなるべし 夜分尤よし

露は 哀なるこゝろ 消安き心 のぼるこゝろも有

霧は 底深き心 ちかく見るべし

露時雨 驚く心 寒に移る姿有べし 空より降る雨にあらず 露の

多きを云

案山子ハ 人情也 古雅なるべし

稲ハ 富貴なり 民の悦ぶ姿有るべし

秋の霜ハ 老に驚く心

行秋は 遠く見る体の淋しき心

冬之部

水仙は 美しく淋しき心 生花躰植体よし

落葉ハ ものゝあらはるゝ心 音の姿も有べし

冬籠ハ 物に蓋をしたる心 老の情よし

初霜ハ ちらりと見たる所を云

霜ハ 動かぬ心 朝霜ハ寒く夜の霜ハ静也

雪ハ 一面に静なる心

初雪ハ 甚風雅なる心 めづらしき心 積り兼る姿 ものに拍子有

る心

夜雪ハ うちとけて静なる心

巨燧ハ むつまじき心

埋火ハ 夜分静なるよし 老の情尤よし

紙子ハ 落ぶれたる心 老の姿あるべし

千鳥ハ 哀に寒し 声の淋しきを賞す 深更の事よし 水辺遁れず

鷹ハ いさミたつ心 大勇の心持有るべし

鴨ハ 昔ししたハしき心 声を賞す

水鳥ハ 惣名也 むつまじく安居の体

茶の花 日和珍らしく覚束なき心

寒菊ハ 霜雪に屈せぬ心 寒の字力入るべし

寒さハ 無風雅なる心 腹のたつ心 気丈なる心

鷓鴣ハ 住居の覚束なき心 形の小さきものにて志の大きな心

帰花ハ 老後の思ひ出なるべし

冬の梅 纔に咲出たる(場所)所場の暖なる気味をおもふべし

梢ハ 山家の体 長命の人などおもふべし

納豆汁 菜食等紛安すし いづれも温補のもの也 好む所の人柄

河豚汁 ニて分つべし

氷は ものにへだて有る心

蚊ハ いさぎよき心にして淋しミ有り

四季の月

朧月ハ 幽に見定めぬ心 おぼつかなき心 昼ハ霞夜ハ朧一物二名

也

春の月 底面白き心 口外に花あるやうにすべし 春宵一刻価千金

の心持有べし

夏の月 こゝろよく清き心 口外に涼しきこゝろ有るべし 短かき

こゝろもあるべし

初月ハ 七月也 ものゝ改りて珍らしき心よし

盆の月 便りなき心 又口外に踊有べし

名月ハ 物の真中なる心 世界に満たる豊なる心よし 外に又伝有

り

月見ハ 人情興ずる心也 見の字に力入るべし

冬の月 定なき空におもはず花やかなる心 寒き心も花有り

寒月 きびしき心 氷堅まる心 骨にもものゝしみ渡る心も有べし

四季の風

春風 空吹風也 天气晴て又雨を催す心有り はるかなる景曲有べ

し

涼風 雨晴の気味 水辺のこゝろ 朝夕にも有べし 風薫るハ題に

あらず 薫の字も涼しき心也

秋風 ものゝたゆむ心 こゝろなく力のぬけたる味也

野分 八月に吹大風也 暴風と書

木がらし ものを吹通す心 強くあたる心 口外に艸木の枯たる心

有べし

四季の雨

春雨ハ ものを生長する心 ほつと匂ひ有る心

五月雨 日にくはてしなき心 ものを降隠す心 世界一面に匂作

るべし したゝるき心も有

白雨ハ 勢ひある心 民の悦ぶ姿尤よし

秋雨 しづかなる心 かはき兼る心

時雨 甚風雅なる心 あはれに面白き心

秋の暮の習ひ、中秋の夕間暮也。此題淋しき事ハ誰くもしれる所也。当流にてハ、淋しからぬものを掛合せて淋しく句作る也。たとへば、

秋の暮肥たる男通りけり

大きな家ほど秋の夕かな

是らを以考へしるべし。

一、初の字、若の字、白の字頭にあるものは、其字の詮たつやうに句作いたす事肝要也。夜昼朝夕の字、四季の文字、或ハ寒の字など頭にあるもの、同じ其心也。字意をよく工夫して取はづさぬ様にいたすべき也。

右本情の有増記もの也。是にもれたるものハ、自得の場に至りて

一案するときハ、明白にしるべき也。

右、正風体^{注2}蕉流発句調練の大意、是に過たるものなし。修行おこたらず、はやく血脉の妙処に至るもの也。

蕉門道統二世

五老井 許六

宝永三乙酉三月

注

- 1 天理本は「或日カノ画讃ヲ……」とする。
- 2 脱字か。天理本に「芭蕉流……」とする。